

基数不変量のゲーム理論的バリエーション

後藤 達哉

神戸大学

2023年9月23日

日本数学会秋季総合分科会 2023 @ 東北大学

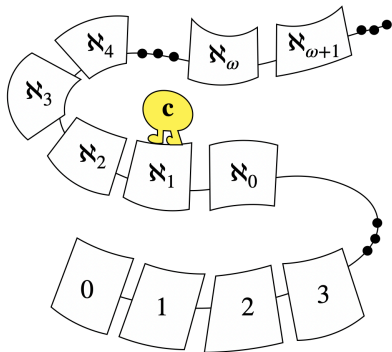
本研究は Jorge Antonio Cruz Chapital および林佑亮との共同研究である
本研究は JSPS 科研費 JP22J20021 の助成を受けたものである

集合論

集合論は無限集合，特にその濃度について様々な考察をする分野である。

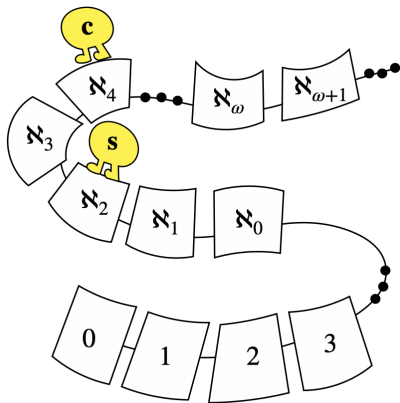
可算濃度を \aleph_0 とし，連続体濃度を c と書く．可算濃度の一個次の基数を \aleph_1 と書く．

$\aleph_0 < c$ は ZFC の定理 (Cantor) だが， c が \aleph_1 かどうかであるかは ZFC で決定できない (Gödel, Cohen)．



基数不変量

連続体の**基数不変量**は実数の構造から定まる基数である．それらは典型的には \aleph_1 以上 c 以下の値を取る．それらの多くは \aleph_1 と等しいことも c と等しいことも ZFC では証明できないものである．



無限ゲーム

ターン数が無限 (ω) の2人が対戦するゲーム (無限ゲーム) は、集合論において非常に重要。

特に、決定公理は無限ゲームに関する重要な公理だが、選択公理と互いに排反である。今回は特に決定公理のことは考えず、普段どおり選択公理を仮定する。

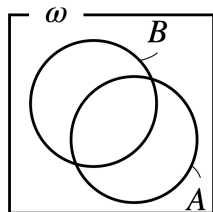
本研究は基数不変量をゲーム理論的に修正して得られるものを調べることにより、基数不変量とゲーム理論の二つの分野を接続する。

splitting number の定義

自然数の無限集合 A, B について A が B を
分割するとは,

$$|B \cap A| = |B \setminus A| = \aleph_0$$

を満たすこと. 自然数の無限集合の集合 \mathcal{S} について



- \mathcal{S} が **splitting family**

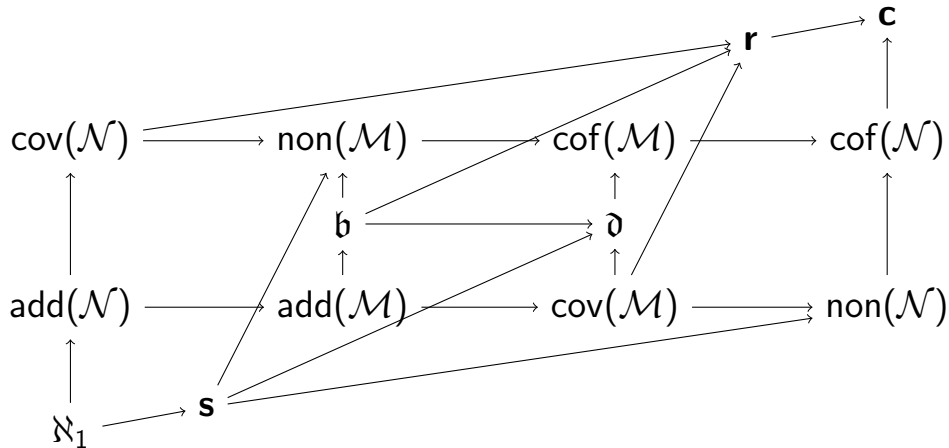
$$: \iff (\forall B \in [\omega]^\omega)(\exists A \in \mathcal{S})(A \text{ が } B \text{ を分割する})$$

次の s を splitting number という :

- $s := \min\{|\mathcal{S}| : \mathcal{S} \text{ は splitting family}\}$

s と基数不変量

s は連続体の基数不変量の典型例である。



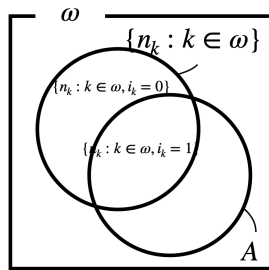
splitting game

集合 $A \subseteq \mathcal{P}(\omega)$ を固定. 次のゲームを A に関する **splitting game** と呼ぶ:

プレイヤー I	n_0	n_1	\dots
プレイヤー II	i_0	i_1	\dots

$n_0 < n_1 < n_2 < \dots < n_k < \dots$ は単調増大な自然数列で, $i_0, i_1, \dots, i_k, \dots$ は $\{0, 1\}$ の元の列. プレイヤー II が勝つ \Leftrightarrow プレイヤー II が 0 と 1 をそれぞれ無限回プレイしていて, かつある $A \in \mathcal{A}$ が存在して,

$$\{n_k : k \in \omega\} \cap A = \{n_k : k \in \omega \text{ and } i_k = 1\}.$$



splitting game に関する基数不変量の定義

定義

$$s_{\text{game}}^{\text{I}} = \min\{|\mathcal{A}| : \mathcal{A} \subseteq \mathcal{P}(\omega),$$

プレイヤー I が \mathcal{A} に関する splitting game で
必勝戦略を持たない }

$$s_{\text{game}}^{\text{II}} = \min\{|\mathcal{A}| : \mathcal{A} \subseteq \mathcal{P}(\omega),$$

プレイヤー II が \mathcal{A} に関する splitting game で
必勝戦略を持つ }

splitting game に関する定理

次はかんたんにわかる.

命題

$$\mathbf{s} \leq \mathbf{s}_{\text{game}}^{\text{I}} \leq \mathbf{s}_{\text{game}}^{\text{II}} \leq \mathbf{c}.$$

次は議論が必要.

定理

$$\mathbf{s}_{\text{game}}^{\text{I}} = \mathbf{s}_{\sigma} \text{ かつ } \mathbf{s}_{\text{game}}^{\text{II}} = \mathbf{c}.$$

(\mathbf{s}_{σ} の定義は次のページ)

σ -splitting number の定義

自然数の無限集合 A と $f: \omega \rightarrow [\omega]^\omega$ について A が f を σ -分割するとは、

任意の n に対して A が $f(n)$ を分割する

ということ。自然数の無限集合の集合 \mathcal{S} について

- \mathcal{S} が σ -splitting family

: $\iff (\forall f: \omega \rightarrow [\omega]^\omega)(\exists A \in \mathcal{S})(A \text{ が } f \text{ を } \sigma \text{ 分割する})$

次の s_σ を σ -splitting number という：

- $s_\sigma := \min\{|\mathcal{S}| : \mathcal{S} \text{ は } \sigma\text{-splitting family}\}$

s と s_σ が ZFC で等しいことが示せるかどうかは長年の未解決問題！

splitting* game

集合 $A \subseteq \mathcal{P}(\omega)$ を固定. 次のゲームを A に関する **splitting* game** と呼ぶ:

プレイヤー I	i_0	i_1	...
プレイヤー II	j_0	j_1	...

$i_0, i_1, \dots, i_k, \dots$ と $j_0, j_1, \dots, j_k, \dots$ はどちらも $\{0, 1\}$ の元の列. プレイヤー II が勝つのはプレイヤー I が有限回しか 1 を言わなかったとき, または,

$\{k \in \omega : j_k = 1\}$ は A の元でかつ $\{k \in \omega : i_k = 1\}$ を分割する

となるとき.

splitting* game に関する基数不変量の定義

定義

$$s_{\text{game}^*}^{\text{I}} = \min\{|\mathcal{A}| : \mathcal{A} \subseteq \mathcal{P}(\omega),$$

プレイヤー I が \mathcal{A} に関する splitting* game で
必勝戦略を持たない }

$$s_{\text{game}^*}^{\text{II}} = \min\{|\mathcal{A}| : \mathcal{A} \subseteq \mathcal{P}(\omega),$$

プレイヤー II が \mathcal{A} に関する splitting* game で
必勝戦略を持つ }

splitting* game についての考察

splitting* game はプレイヤー II にとって splitting game より難しいゲーム.

したがって, $s_{\text{game}}^{\text{I}} \leq s_{\text{game}^*}^{\text{I}}$ かつ $s_{\text{game}}^{\text{II}} \leq s_{\text{game}^*}^{\text{II}}$. つまり,
 $s_{\sigma} \leq s_{\text{game}^*}^{\text{I}}$ かつ $s_{\text{game}^*}^{\text{II}} = c$.

splitting* game についての定理

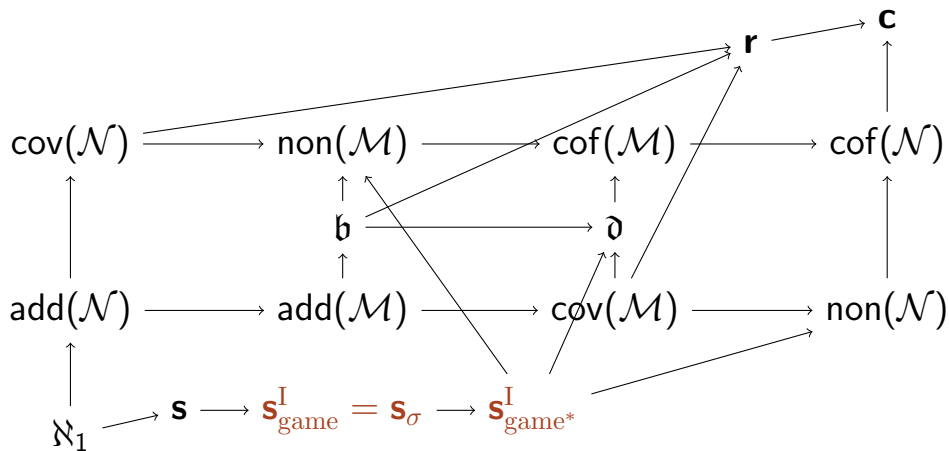
定理

命題 $s < s_{\text{game}^*}^I$ は ZFC から相対的に無矛盾.

定理

$s_{\text{game}^*}^I \leq \text{non}(\mathcal{M}), \mathfrak{d}, \text{non}(\mathcal{N}).$

$\mathbf{s}_{\text{game}}^{\text{I}}$ を追加した図式



参考文献

- [Bar10] Tomek Bartoszyński. “Invariants of measure and category”. In: *Handbook of Set Theory*. Springer, 2010, pp. 491–555.
- [BJ95] Tomek Bartoszyński and Haim Judah. *Set Theory: on the structure of the real line*. CRC Press, 1995.
- [Bla10] Andreas Blass. “Combinatorial cardinal characteristics of the continuum”. In: *Handbook of set theory*. Springer, 2010, pp. 395–489.
- [HMM10] Michael Hrušák, David Meza-Alcántara, and Hiroaki Minami. “Pair-splitting, pair-reaping and cardinal invariants of $F\sigma$ -ideals”. In: *The Journal of Symbolic Logic* 75.2 (2010), pp. 661–677.
- [IS88] Jaime I. Ihoda and Saharon Shelah. “Souslin Forcing”. In: *Journal of Symbolic Logic* 53.4 (1988), pp. 1188–1207.

我々のプレプリント： arXiv:2308.12136